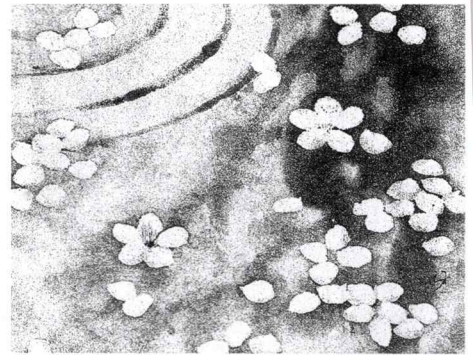


朝日歌壇俳壇



〈ハナイカダ〉 北村さゆり

小林貴子選

そとく草食へ放題の牧開き
 冷やかに買われ帰る苗木市
 越中の夜行便なりほたるい
 出世など眼中になし新社員
 ノアの舟乗れる訳なく種を蒔く
 初蝶や光の衰に見え隠れ
 戦争が続く限りは春じゃない
 のどかさやカント散歩の午後四時
 これ程の数の幸あれ雛あられ
 雁風田や渚の砂をのりふ潮

(千葉市) 長谷川くぐ
 (市川市) 西山 智朗
 (横浜市) 田中 靖三
 (始良市) 井之川健児
 (八代市) 吉原利津子
 (生駒市) 高橋 裕樹
 (東京都江戸川区) 十亀 弘史
 (川越市) 横山由紀子
 (横浜市) 生田 康夫
 (倉吉市) 尾崎 慎雄

【評】一句目、久しぶりに広い大地に放たれた牛や馬にとって、新鮮な草は美味しいことだろう。二句目、冷やかに楽しんでつもりが、売り手が一枚上だった。三句目、富山湾で獲れて、一気に流通。四句目、人の価値観は容易に移り変わる。

長谷川權選

春は曙ミサイルの飛び交ひぬ
 わが俳句花を桜と知りてより
 露の萎まだこの星をよひつて
 春月の愛の波動や熊野灘
 永らへて五体に重き日永かな
 春の月照らすな今日も車中泊
 恋猫の三つ巴なり駐車場
 足垂らす石桶の子も水温む
 春愁や猫の機嫌の取りがたく
 あたたかや赤子のしやぶる足の指

(福岡市) 釋 鋼規
 (長野市) 縣 展子
 (東京都杉並区) 漆川 夕
 (新宮市) 中西 洋
 (長崎市) 下道 信雄
 (熊本市) 柳田 孝裕
 (東京都東区) 小出 功
 (東京都練馬区) 吉竹 純
 (山形市) さとうみち子
 (川越市) 渡邊 隆

【評】一席。「枕草子」も時代変われば……。この句から新年度を始めたい。二席。俳句をはじめたばかりのころを思う。初々しい初心。三席。何も知らない無垢のものたち。「まだ」がたいへん重い。十句目。柔らかな赤ちゃん。大人はムリ。

大串 章選

古稀の稀に希望の希あり黄水仙
 映深き出で湯の宿に聞く初音
 ☆秘湯への道は渋滞山笑ふ
 春の夢人魚の泡のやうに消ゆ
 捨つる物多き陋屋山笑ふ
 閉校の母校の校歌木の芽雨
 たがやすや大地の眠り覚ますと
 初蝶の人を怖るる気配なし
 草餅を作る手伝ひ孫五つ
 初蝶が馬の尻尾と遊んでる

(神戸市) 倉本 勉
 (倉吉市) 尾崎 慎雄
 (大阪市) 貝田ひでを
 (高松市) 信里由美子
 (長崎市) 徳永 桂子
 (柏崎市) 森山 恵子
 (川崎市) 堀田 耕一
 (東京都足立区) 望月 清彦
 (静岡市) 金子 賢
 (厚木市) 北村 純一

【評】第1句。「稀」「希」「黄」と同音異義語を重ねてリズム感あり。気に入りの句。第2句。「出で湯の宿」で「初音」を聞いた。思い出に残る旅でしょう。第3句。「秘湯への道」が「渋滞」とは意外や意外、さぞかし山も笑ったことだろう。

高山れおな選

ふらふらとや漕げと翼の戻らぬ
 食べていて妻にえくぼ桜餅
 立子忌の伸び放題の土筆かな
 春の服着てマネキンの旅支度
 ☆秘湯への道は渋滞山笑ふ
 競り合つて土筆摘む兎の口突る
 春キヤベツたつぷり炒め皿うどん
 春風や小便小僧尻出して
 しやぼん玉一つ一つの天国へ
 積みあがる駄句の山見て山笑ふ

(東村山市) 内海 亨
 (前橋市) 田村 とむ
 (大阪市) 今井 文雄
 (久喜市) 深津 博
 (大阪市) 貝田ひでを
 (厚木市) 北村 純一
 (長崎市) 徳永 桂子
 (姫路市) 松田 正義
 (新潟市) 磯貝 英一
 (我孫子市) 渡辺 肇幸

【評】内海さん。翼とは結局、若さの事？ 田村さん。桜餅のもたらす幸福感。今井さん。星野立子の最初期作に〈くまごとの飯もおさいも土筆かな〉。十席。豪快で面白いが、この「見て」のような言葉遣いをしなければ駄句は減るでしょう。

うたをよむ 虚子の忌日に

福畑廣太郎

四月八日は私の曾祖父・高浜虚子の忌日である。私事で恐縮ではあるが、このところホトトギス同人の訃報に触れ、親しくさせて頂いていた方には弔句を送ることが増えて来た。初めて弔句を送ったのは、もう数十年前になるが、先ず次の虚子の句が脳裏に浮かんだ。

子規逝くや十七日の月明に
 御存知の方も多いのではないかと思うが、明治三十五年九月十九日、正岡子規逝去の時に詠んだ句である。自身の感情

を全く言わずに事実を淡々と詠んだところに却つて虚子の心境が如美に語られているという名句である。この句からも推察出来るように虚子は慶弔贈答句の達人であると言われてきた。俳句は「存問の詩」といわれるように、いわゆる人に対する挨拶を基本としている。もちろん虚子には弔句のみならずこんな句もあり

これよりは恋や事業や水温む
 という大正五年二月十一日に詠まれた高商、つまり現在の「一橋大学の卒業生に向

けた贈答句もあり、この句からは学生に對してのウィットさを感じられて読む側の頬も緩んでくるだろう。

春寒さわが誕生日合ツ点じや
 他者への贈答というより、これは昭和二十七年二月二十二日、虚子自身の誕生日に詠んでいる。何ともユーモアに富んだ詠み方ではあるが、晩年虚子は俳句を「極楽の文学」とも称しており、崇高な祈りのように位置付けている。

明易や花鳥調詠南無阿弥陀
 その祈りの代表ともいえるのが昭和二十九年七月十九日に詠んだこの句である。

山田佳乃句集「菊炭」 「円虹」主宰の第4句集。2019年から25年までの363句を収めた。「葉包の折鶴ひとつ春の風邪」「透明な音立新樹伸びゆける」(ふるんす堂・3080円)
 山尾玉藻句集「くれぐれと」 「火星」主宰の第5句集。2015年から24年までの作品を収録。「くれぐれと夕風渡る浮葉かな」「屋根に人現れはたと春景色」(角川書店・2970円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などに掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかは1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 清海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

